

あの日は寒かったし」

千歌「今、先輩の顔がね、浮かんできてるの」

恭子「え？　　どういうこと？」

S E　　電車の発車ベル

車内アナウンス「ご乗車ありがとうございます。どうぞいま  
す。この電車は新快速豊橋行きです」

千歌（M）「二年前のことだった。先輩が出  
場する吹奏楽のコンクールに、私もついて  
いった」

勇樹（与三兵衛と同じ声）「ほら、こいつが  
オレの相棒さ」

千歌（M）「先輩が、自分の命と同じくらい  
大事だという、フルートをみせてくれた」

千歌「結構重いですね」

勇樹「触らせたことなかったな」

千歌「はい、はじめて」

千歌（M）「このときはまだ、私は吹奏楽部  
にいない」

勇樹「オレ、この大会が終わったらさ、音大へ進もうと思ってる」

千歌「プロを目指すんですね、スゴイ。私、応援します」

勇樹「上京するかも？」

千歌「そのときは私、東京の大学を受験しますし」

勇樹「ありがとう。正直、千歌と離れ離れになるのが怖かった」

千歌「それまで、浮気しちゃダメですよ」

勇樹「するかッ」

乗客（女）の声「いやああ！」

乗客（男）の声「逃げて、逃げて」

千歌（M）「電車で人が刺されるのは、テレビの中の出来事だと思っていた」

犯人「うあああああ！」

千歌（M）「長髪の中年男性が、刃物を振り回していた。私の足は接着剤で床にくっついたかのようになり、動いてくれなかった」

勇樹「千歌ッ！」